

巻 頭 言

関西大学東アジア文化研究科紀要『東アジア文化交渉研究』の第10号をお届けする。本号は、10号という節目の刊行であるとともに、表紙をご覧くださいればおわかりのように、松浦章教授の退職記念号でもある。

松浦章教授は、1947年奈良にお生まれになり、県立奈良高等学校から関西大学文学部に入学された。大学紛争のただ中であつた1969年に大学院文学研究科修士課程に進学され、まもなく高等学校の教諭となられた。その後、同大学院日本史学専攻に博士後期課程が開設されるに当たり、東洋文化史専修の第1期生として入学されたが、これは故大庭脩先生のお声掛かりであつたと仄聞している。後期課程修了後、ほどなくして関西大学文学部史学科に専任講師として着任され、爾来39年の永きにわたって、本学での教育と研究に邁進してこられた。

松浦教授のご専門は、明清史、中国近世・近代史、とりわけ東アジア海域交流史であることは周知のとおりである。1987年には「清代における山東・盛京間の海上交通について」などの一連の業績に対して第6回東方学会賞が授与され、1989年には『清代海外貿易史の研究』で関西大学より文学博士の学位が授与されている。そのご業績の世界的卓越性は、中国において2005年優秀古籍図書二等賞の栄に浴されたことから明らかであろう。このように斯界の第一人者として学術研究を牽引してこられた松浦教授ご自身から、その研究回顧を拜聴する機会を、昨年12月の関西大学史学・地理学会大会の特別講演および本年1月の東アジア文化研究科での最終講義において、得ることができた。とくに後者の最終講義は、研究科長である私から懇願してお引き受けいただいたものであつた。本研究科の大学院生たちに、研究者としての歩みをご自身の口から是非伝えていただきたいと強く思ったからである。その二つの講義はともにきわめて印象深く、深い感銘を与えるものであつた。とりわけ「帆船から汽船」へと研究対象を拡大されていったプロセスは、不遜を懼れずに言えば、真摯な歴史研究のあり方を実例として示したもののようには思えた。「精力的」という言葉を体現したようなお仕事ぶりや旺盛な探究心と資料博捜を支えている研究者魂の一端を垣間見たように感じたのである。

研究者としてのみならず教育者としても、松浦教授は率先垂範を実行されてきた。その厳しいながらも丁寧で徹底した指導ぶりは、そのご指導の下で多数の博士・修士の学位取得が輩出したことから知られよう。とりわけ大学院の留学生の指導においては、とまどうことの多い私たち教員にとって文字どおりの模範であつた。また、松浦教授の直接の指導下にある院生たちの懸命な努力ぶりは、他の院生にも大きな刺激を与えることとなり、それが本研究科の「文化」として貴重な財産となっている。現在、本研究科は、多くの人文系大学院が定員充足に苦慮する中で、毎年

定員以上の入学者を迎えることができているが、その出発点は、松浦教授が本学の文学研究科長であったときに院生の指導体制を改善され、とくに課程博士の輩出に尽力されたことであった。この試みがなければ、2007年のグローバルCOEプログラムの採択はなかったであろうし、東アジア文化研究科が今日の形をとることもなかったであろう。

『東アジア文化交渉研究』は、グローバルCOEプログラムの教育組織として設置された文化交渉学専攻の研究成果報告書として刊行を開始したものである。それが第10号を迎えたということは、私たちの提唱する文化交渉学構築のプロジェクトが10年を閲したということである。この10年を振りかえって見れば、私立大学学術フロンティア推進事業および私立大学戦略的基盤形成支援事業などの大型プロジェクトや本学東西学術研究所の研究活動において、私たちは松浦教授をいつも長と仰いで懸命に走り続けてきたし、COEプログラムにおいても松浦教授は最も有力な推進担当者として事業の完遂を牽引されてきた。COEスタートから10年という節目にあたって、これまでの松浦章教授のご尽力に篤く感謝申し上げ、今後ますますのご盛祥を祈念するとともに、本研究科の充実発展を決意して巻頭の言葉としたい。

2017年3月

関西大学大学院東アジア文化研究科長

藤田高夫